

いま埼玉を生きる

「埼玉日報」創刊20周年企画

「山西残留特務団」元中国帰還者連絡会

いなば いさお
稲葉 績さん

1923年11月 東京都生まれ。1943年10月 立正大学卒。学徒兵として東部第63部隊入隊。同12月 山東省北支派遣楓兵団通信部隊配属。1945年1月 見習士官として山西省代県独立歩兵混成第三旅団6大隊配属。同3月 6大隊通信隊新編成に伴い初代通信班長に任命。同8月 関東軍救援のため山西省太原待機中に終戦。1946年2月 帰国準備中、旅団司令部より残留命令下る。山西省原平鎮に集結。第10総隊編成。中共軍と交戦に入る。1956年7月 太原軍事法廷にて不起訴釈放。興安丸にて帰国。「過去の戦争体験を反省。残された命を平和のために尽くしたい。」が、現在の心境。

昭和20年(1945)年8月15日、太平洋戦争は終結した。しかし、この日が終戦にならず、そのために一度拾った命を失い、或いはその後十年近くの人生を棒に振った日本兵たちがいた。山西残留特務団(団隊長今村方策)二千五百名である。

当時山西省に駐屯していた北支那派遣軍第一軍(軍司令官澄田賤四郎中将)隷下の第百十四師団・独立混成第3旅団・同第14旅団・第5独立警備隊基幹5万数千人から選出された義勇兵である。

「終戦後の山西残留元第一軍特務団実録」(残留特務団実録編集委員会・平成元年七月十五日発行)によれば、凡そ事情は以下の通りである。

《終戦により、外地派遣部隊は帰国復員することになった。しかし、当時中国の奥地山西省に駐留の第一軍は、特殊の情勢(戦時中からあった日本軍と山西軍(閻錫山)との親密関係)から左記の目的達成のため、一部部隊の残留を企画されたのであった。》

記

- ①第一軍隷下各部隊の復員及び居留民の帰国輸送を円滑に実施させるため
- ②祖国復興につながる山西省の再建に協力するため
- ③戦犯容疑者の早期釈放を実現させるため

それがために、北支派遣第一軍隷下各兵団は、中国第二戦区司令官閻錫山の要請に基づく軍命令により、一部の将兵が山西省に残留し、特務団を編成する事態になった。(「発刊のことば」より)

以来昭和二十四年四月までの満三年余、特務団は山西省各地で中国人民解放軍(中共軍)と交戦、太原陥落後同捕虜として抑留(一部獄中)生活、労働に従事。昭和二十八年、九年に帰国復員。獄中生活者は昭和三十一年七～九月帰国。最後

の抑留者の帰国は昭和三十八年九月だった。

しかし、この記録が日本政府のどこにもない。昭和三十一年十二月三日、衆議院「海外同胞引揚及び遺家族援護に関する調査特別委員会」に於ける澄田暎四郎（元第一軍司令官）、山岡道武（同参謀長）の証言（「勝手に残った」「逃亡兵」等）により戦史になかった事実として歴史の舞台から葬り去られて今日に到る。当然これに係る国家の補償は何もない。この戦いで死んだ兵士はただの「犬死」であり、帰還者は軍規違反の“戦後非国民”である。

なぜこんな事が起こり得たのか。毛沢東指導下の中国共産党（中共）、蒋介石指導の中国国民政府（国府）の対立拮抗である。中国にとって、日中戦争は日本軍撤退後の国づくりをめぐる中共軍と国府軍の覇権争奪戦でもあった。

山西省は当時、中国軍第二戦区司令官閻錫山（国府軍）率いる山西軍の支配下にあり、山西駐在の日本軍（第一軍）は、この山西軍に降伏した形だった。昭和二十年九月までに、関は日本軍が占領していた山西省全域と重要施設を全て接收、五万数千人の日本軍と居留民を管理支配下に置いた。そこに陳西省方面から進出した優勢な中共軍がじりじりと山西軍を圧迫。守勢窮地に陥った閻錫山の考え出しだのが残留日本軍の活用、中共軍との戦闘に日本兵を使う「特務団」の企画だった。

日本軍と居留民の死命を制する閻は、開始されたばかりの日本居留民の帰国を中断、第一軍の復員輸送を妨害し、「残留特務団が実現しない間は、円滑な輸送は実施されない」と宣伝。第一軍司令官澄田暎四郎・参謀長山岡道武・太原日本居留民会長河本大作（張作霖爆殺事件首謀元関東軍大佐高級参謀）等に協力をもちかけた。

閻はまた同時に軍司令官澄田ほか第一一四師団三浦三郎中將、元特務機関長恩田忠録大佐等を戦犯容疑者として軟禁の上、無事帰国の可能性をちらつかせて第一軍の喉元をしめ上げた。

第一軍首脳が閻錫山のそのおどしと懐柔の提案にのった。それが事実である。

「元第一軍特務団実録」は、特務団編成から残留に至るその義勇の記録である。

特務団兵士たちは誰一人好んで勝手に居残ったのではなかった。「兵士たちと居留民を無事日本に送り届けるために、若い君達が盾となり残ってくれ」と上官に説得され、懇請され、軍務の大事を信じて勇を鼓した地方出身の二男、三男たちだった。上官の命令は天皇の命令と最後まで信じた義勇の士たちでもあった。

だから、昭和二十四年二月、中共軍による大原陥落の直前、自らの帰国に際して戦傷療養中の特務団兵士を訪れた澄田中將の訣辞「わしが帰国したら、二～三万の義勇兵をつれてくるから、今村君を助けて頑張ってくれ」も、兵士たちは信じた。でなければ、澄田中將のこの帰国は、第一級の敵前逃亡以外の何物でもない。

棄民の証言

この事実は語られなければならない。誰かが語り継ぎ、記録にとどめなければならない。その事実を証言できる数少ない元日本兵の1人、それがさいたま市在

住の稲業績さん（83）である。

「日本軍が侵攻した集落で（食料を）略奪されなかった部落はほとんどありませんでした」六月二十五日、川越市笠幡の中国帰還者連絡会（中帰連）平和記念館で開かれた「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」第四回総会の席上、稲業績さんは自らの意志で語り出した。

「初年兵に度胸をつけさせるため」と称して、生きた中国人捕虜を銃剣で突き刺す刺突訓練（肝試し）。殺した捕虜の首を押し切りで切り落とし城壁の上に並べ立てる“みせしめ。強姦。放火等“々、その現場に稲業績さんも立ち合った。

なら、それを包み隠さずに語ろう i “陛下の赤子”を棄民にまで貶めた国家への起訴状として、同時に「上官の命令」の免責手形をふりかざして人道の枠を踏み越えた兵士自分への論告訴状として。

本来なら、太原陥落時に全員捕虜抑留の上で起訴されてしかるべき日本軍の蛮行累積。しかし中国政府は敢えてそれをしなかった。なぜか。「戦犯といえども人間。人間である以上人格を尊重しなければならない」とする捕虜処遇の基本を最後まで崩すことのなかった中国政府の収容所運営。高いモラルに、残留特務団は奇蹟を見た。一九五〇年代初頭、太原管理所約百五十名、遼寧省撫順戦犯管理所九百六十九名の、まさかの人間体験であった。

それを受け継ごう。自分たちがしたこと、されたこと、同じ「戦争」という名でしたことのアマリの隔たりを、そのまま語り、子どもたち孫たちの未来に受け継いでもらおう。それこそが、国家の理不尽に甘んじ、その故に奇蹟を体験した特務兵の使命。稲業績さんたち、話し出した者々の胸の内である。

高齢化など組織運営の事情で、中国帰還者連絡会（中帰連）は二〇〇二年に解散した。

「生きているうちにやらねばならないことがある」しかし、稲業績さんのつとめはまだ道半ば。戦争というものの理不尽、非人間性。しかし、その戦争の中でさえ人間として生きることの大切さ、神々しさ、生きられる確かさ、撫順で教えてもらった人間のあり方を、戦争を知らない若者たち、戦争の実態を知り得なかった銃後の人たちに、しっかりと語り継ぐことが、明日に残されている。

一枚の国債。桐花紋の銀盃一個。そして（あなたの先の大戦における旧軍人軍属としての御労苦に対し衷心より慰労します 平成八年五月二日内閣総理大臣橋本龍太郎）一枚の賞状。

元北支派遣軍第一軍独立混成第三旅団歩兵第六大隊初代通信班長。昭和十八年十月招集繰り上げ学徒兵、稲業績の証言は、まだ終わらない。終われないのである。敗走中山中に I 人とり残され、自決の銃口をこめかみに当てた時、『死ぬんじゃない』と告げた母の幻影。今も蘇る、その影のためにも。

（2007年7月22日掲載）